会員便り

昭和五十年代の市町村史誌の刊行

後藤正二

現在までの市町村史誌の出版状況とその問題点については、後日、稿を改めて述べる予定である。ここでは、昭和五十年代以降の出版状況と今後の問題についての所見を述べてみたい。

昭和五十年三月一日には、賀川光夫氏監修の「宇佐市史」上巻が、宇佐市史刊行会から出版された。A5判、四九四ページには、地誌編、先史・原史時代・古代史各編が納められている。また、同日付けで、耶馬渓町史編集委員会の手で「耶馬渓町史」が刊行された。B5判、千百九十ページの大著であるが、途中中心人物の小川伝太氏が他界されたことは、今日の耶馬渓町を思う時にも、惜しまれてならない。なお本書の内容は「史」でなく「誌」である。

翌々年の五十二年三月三十日には、賀川光夫氏監修の「宇佐市史」中巻が刊行された。同じくA5判であるが、八六二ページの大著の中には、中世史、近世史、現代史の各編が納められている。どうしたことか、戦国時代以降、宇佐神宮の話はプッツリ切れてしまっている。

同年九月三十日には、羽柴弘氏監修の「蒲江町史」が蒲江町教育委員会から刊行された。A5判、六五一ページの精練されたレイアウトの本書は、耶馬渓町と同様、「史」でなく「誌」である。

本年三月三十一日には、共に渡辺澄夫氏監修の「真玉町誌」と「犬飼町誌」が刊行せられた。前者はB5判、五三五ページ。後者はB5判、六五五ページといういずれも大部の町誌である。また、本年度中には「宇佐市史」下巻も刊行されると聞いている。

ところで「耶馬渓町史」と「蒲江町史」は、民俗編がそれぞれ二〇二ページと一八七ページであり、本会々員染矢多喜男氏の指導のおかげで、本格的民俗が記録されていることは、何よりも喜ばしいことである。ただ前者においては、豊前の

特色を生かした、例えば英彦山・求菩提との関係、更には宇佐・国東との関係を論じた項を立てて特色を出すのもよく、後者の「蒲江町史」において、リアス式海岸のあのすばらしい自然と人の生活との関係で、漁業関係民俗に多くのページをついやしているが、欲をいえば、あの大自然の分析と描写が更に欲しかった。「宇佐市史」は、監修者の賀川光夫氏の学問分野の考古学の項は、県下いかなる市町村史に比しても出色、これに及ぶもののないことは云うまでもない。ただ中巻に比して論じ足りない面も感じる。また、先にふれたように、読者は宇佐市と宇佐神宮を頭に置いて一読するであろうが、途中よりその歴史の消えて行くのは残念である。この点、下巻でどのようにカバーするのか、楽しみにしたい。

渡辺澄夫氏監修の「真玉町誌」は、とかく六郷満山が論ぜられながら、旧西国東郡側の体制の遅れに加えて、論考の少ないことを思って一読したが、歴史篇に六郷満山の史的展開のないのは、さびしい次第であった。しかし、文化財篇、宗教篇に全体の三分の一を当て、しかも力作であるのは参考になる。これに対して、今後論陣が張られて行くであろう大野川流域を占める「犬飼町誌」は、歴史篇に約四割を割いているが、考古篇に近年の学術調査の成果が生かされていないのは惜しい。両者共に民俗篇は中途半端である。今日でなければ、市町村史誌に記録できぬ分野ではあるまいか。

以上の五市町村史誌が、昭和五十年代になっての刊行であるが、ここで忘れてはならぬのは、山国町の例であろう。同町は、「山国町誌」の刊行を目標に、「町民手作りの郷土誌」をスローガンとして、山国町誌刊行会から「山国町郷土誌叢書」が刊行されている。第一集は、五十三年三月二十日の刊行、A5判、一三〇ページで河野一氏の「山国町の文化財」、溝口隆夫氏の「草本金山史」が納められている。第二集は、五十三年六月二十日刊行、同じくA5判で一五五ページ、この中には河野一氏の「山国農民と年貢」、同じく「藤野木村騒動顚末記」が納められている。第三集、第四集の原稿もすでにできていると聞く。将来は、誤りは正し、足りぬ所は補って一本とするというが、まことにユニークなやり方である。願わくば「町民手作りの郷土誌」もよいが、県下の、あるいは全国の最高頭脳を投入して、いずれかの分野に特色を持たせて欲しいものである。殊に資料消滅のはげしい分野は、民俗であることはいうまでもない。

なお、市町村史誌ではないが、今永正樹氏著「豊前地方ふるさと年表」（B5判、一五二ページ、五十二年刊）と安部光五郎氏著「鶴崎地方歴史年表」（A5判、一七七ページ、五十一年九月一日刊）の出版されていることも、併せ紹介したい。

最後に述べたいことは、渡辺澄夫氏監修による「大分の歴史」十巻が、五十一年十一月十五日以降、大分合同新聞社から、しかも県下の最高頭脳を結集して刊行せられていることは、周知のことであるが、この完結の後の市町村史誌は、従来のようなレベルではいけない。聞く所によると、山香町、院内町、香々地町、狭間町、清川村、本匠村で計画がすすめられていて、近く津久見市も着手するというが、関係者は、「大分の歴史」を読破し、消化して、独善を排して、どうか立派な市町村史誌を刊行されることを祈念したい。また、いまだ本格的な市町村史誌のない市町村も、一本にまとめられることを念願したい。なお、ことのついでに申すと、大分合同新聞社発行の「大分の歴史」は、近年にない大事業であり、これに結集した執筆者、とりわけ監修者のご苦労はいか程かと察しているが、これらの大事業の成果が、わが「大分県地方史」にも現われて来ることを念願するものである。

以上、言い過ぎの点は、お許し願いたい。（53・11・19）

（大分県教育委員会文化課 [redacted]）

新刊紹介

大分県教育委員会編「大分県文化財一覧」

県下に所在する国指定・県指定の文化財を大きく二つの配列によりまとめ、付録として名勝耶馬渓の景勝名称、その所在地・番地を付したものである。

前半には国・県指定物件で有形・無形文化財などを指定区分により指定順に配列し、後半には市町村別に国・県指定文化財の名称・所在地・特色などをまとめてある。

A5版　一三一頁　五〇〇円

発行所　大分県教育庁文化課内

大分県文化財愛護地域活動推進協議会